
495

ろーぜん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

495

【Nコード】

N3243Z

【作者名】

ろーぜん

【あらすじ】

495年もの間、その少女は冷たく、暗い地下に閉じこもっていた。誰の目にも映らず、誰も目に映さず。永い永い歴史の中に突如転機が訪れる。

・・・その少女の名はフランドール

むー、紹介文というのも難しいものです。

そして東方で恋愛ものです。

唐突に書いてみたくなったので。

フランちゃんが出るっていったら大体誰が出てくるかは予想がつく
でしょうね・・・w

そして誰もがいなくなった。

「雨、か・・・」

唐突にそう呟いてみる。

思えば自分がここへ来たあの日も雨だった事を思い出したのだ。思い出せば思い出すほど忌まわしいあの日。

涙が出そうになる感情を必死に抑えようと、少女は手元に置いていたクマのぬいぐるみを強く抱きしめた。

少女の名はフランドールと言った。

吸血鬼の妹、その能力は主に破壊に長けている。いや、裏を返せば全てを破壊する事もできる。

生まれてこの方495年。人というものを見た事がない。

見た事があると言えば十六夜咲夜というここ、紅魔館のメイド長を勤めている人物ただ一人だけである。

それ故実の姉であるレミリア・スカーレットからは危険、と判断され、現在の地下室へと隔離されてしまった。

まだ幼いフランを連れ、レミリアはこの地下室の前へと訪れた。

何をしにきたのか？ここはどこか？質問を投げかけるが一向に返事は返ってこない。

言われるがまま部屋に入るとそのまま重い扉を閉められてしまった。

「お姉ちゃん！ねえ！お姉ちゃんってば！」

必死に叫ぶ。

何故？何故レミリアはこの様な事をするのか？

答えは出てくるはずもない。

「ごめんね・・・」

扉の向こうからただ一言、レミリアはこう言った。
レミリアにとってもこの決断は辛く、厳しいものだったに違いない。
実の妹との距離を自らの手で引き離すのだ。

しかし悲しいのはどちらも同じ。
いつの日か、フランが吸血鬼としての自覚を持ち、人と接することが
できる様になればこの扉を開こう。そう誓ったのだった。
耳を塞ぎたくなる様な状況でも心を鬼にして彼女はその後にし
た。

残るのはフランの虚しい叫びと降り続ける雨の音、ただそれだけ。

「雨は嫌い・・・」

いくらぬいぐるみを抱きしめているとはいえ、やはり涙は出てしま
うものである。

フランはひたすらに泣き続ける。

そして涙が枯れてしまったんじゃないかと思いはじめたとき、扉の向
こうからの声で現実へと戻る。

「妹様、ご飯の時間ですよ」

声の主は先程出てきていた十六夜咲夜だ。

朝昼晩、飯時に時間ぴったりに届けてくれる優秀なメイドである。

「ねえ、咲夜」

「はい？どつなさいました？」

扉越しに質問を試してみる。

「いつになったら出してもらえるの?」

「・・・またその質問ですか」

そう、フランは彼女に対してもう何度もこの質問をしている。

答えは決まって「もう少し」だった。

しかしこの日だけはいつもと違っていた。

「そうですね。お嬢様に聞いてみないとわかりませんが、今の妹様なら幾分落ち着いておられますし、私としては出てこられても大丈夫かと」

「本当!? 咲夜!」

「あくまで私の意見です。詳しくはお嬢様に聞いてみないとわかりかねますね」

「じゃあ聞いておいてよ」

「承知致しました」

では、そう言い残すと咲夜は立ち去っていった。

目の前にあるのは真っ赤な紅茶とケーキ。

「いっつも思うんだけどケーキってお昼ご飯にならないわよね」

文句を垂れつつケーキを一口。

お、これは美味しいぞ。

いつもの甘ったるい味から少し変えてみたのか、今回はなかなか美味しく食べる事ができた。

咲夜の粹な計らいである。

フランはそんな咲夜が大好きなのだ。

ついでに言うとな作者も大好きなのだ。

お昼を食べ終わると途端に人恋しくなった。

唐突に過去の事を思い出したからに違いない。

どうせ寂しくたって誰も来やしないんだから、と割り切ることにした。

いつものようにぬいぐるみをかき集めて一人遊び。

虚しい、ただひたすらに虚しい。

さつさとやめて扉の向こうの世界の事を夢想する。

この扉の向こうは一体どんな所なのだろう。考えるだけで胸が躍った。

そんな場所へ行けるのもあと少しの我慢をすればいいのだろうか。

そう思えばこんな日々も悪くない。

好きな時に遊ぶ、好きな時に眠る事ができる。

さらには時間ぴったりに食事まで届けてくれる。

「さつすがお姉ちゃんの妹ね。待遇が違うわ！」

気分を明るく保つ。

何だか今日はつくづくおかしな日だ。何故そう思うのか、主な理由は2つ考えられる。

まず第一に、こんなに一度に色々な感情を持つ事自体が珍しい。強いて言えばこんなに独り言を言うのも初めてだった。

そして第二。扉の向こうがいつにも増して騒がしいのだ。

来客だろうか？と考えてみたが、雨に来客などどうかしている。

「雨の日に来客する物好きな人もいる所なのね。幻想郷って」

まだ見ぬ幻想郷へ思いを馳せる。

しかし落ち着いてみると声は何だかこの地下室に近付いているような気がする。

まさかお姉ちゃん！？焦りと同時に期待感が高まる。

誰かが外から扉に手をかけてゆっくりと開く・・・

訳でもなかった。

目に入ったのは七色の輝きを放つ弾幕。

何者かが扉を破壊したのだ。

ああー、扉なんて開けるの面倒くさい。そう言わんばかりに左手で後頭部をポリポリと掻きながら、その少女は部屋へと入ってきた。

「よう、話は聞いてるぜ！早速弾幕ごっこだ！」

威勢のいい掛け声とともに腕をこちらへ構えてきた。

現れたのは、霧雨魔理沙

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3243z/>

495

2011年12月11日06時47分発行